科目名	病原体検査学講義	分野・必選別・単位数	専門科目 (臨床検査技術学)	選択	2単位

科目責任者	◎教授　鈴木幸一　　教授　後藤一雄　　教授(兼)　槇村浩一　　准教授　松村　充						
課程	博士前期	配当年次	1年	配当学期	後期	授業方法	講義

授業の概要	臨床微生物検査室で従来から用いられている病原体特異的な臨床検査方法に加え、昨今普及してきた迅速法の原理とその問題点にも焦点を当て、さまざまな症例や検体に応じた最も適切な検査法の選択と正確な検査の実施ができるような知識を習得する。
授業の到達目標	①各種病原体に特異的な検査法を挙げ、その機序を概説することができる。 ②迅速法の原理、とくに遺伝子検査学的手法を応用した各手法とその問題点を説明できる。 ③薬剤耐性菌の迅速同定法の問題点を説明できる。 ④さまざまな症例や検体に応じた最も適切な検査法の選択ができる。

授業計画

回数	担当者		行動目標
1	鈴木　幸一	教　授	各微生物の病原性および生物学的バックグランウンドを説明できる。また、グローバルな感染症対策につき概説できる。
2	鈴木　幸一	教　授	各微生物の病原性ならびに疫学的な従来法による同定と、遺伝子検査手法の効果的な組合せを、さまざまな微生物について検討する。
3	鈴木　幸一	教　授	グローバルとくにアジア地域の感染症疫学上の問題を概説でき、その中で臨床検査上の問題点を説明できる。
4	鈴木　幸一	教　授	ウイルスのstrainの多様化や細菌の薬剤耐性化などをもたらす遺伝子変異・形質転換につき分子生物学・分子進化学の言葉で説明でき、疫学との関連を概説できる。
5	後藤　一雄	教　授	動物モデルを利用した病原性微生物研究を概説でき、そこで見出された知見や技術が医療に与えるインパクトにつき考察できる。①
6	後藤　一雄	教　授	動物モデルを利用した病原性微生物研究を概説でき、そこで見出された知見や技術が医療に与えるインパクトにつき考察できる。②
7	後藤　一雄	教　授	動物モデルを利用した病原性微生物研究を概説でき、そこで見出された知見や技術が医療に与えるインパクトにつき考察できる。③
8	後藤　一雄	教　授	動物モデルを利用した病原性微生物研究を概説でき、そこで見出された知見や技術が医療に与えるインパクトにつき考察できる。④
9	槇村　浩一	教授(兼)	微生物検査室で従来から用いられている臨床検査方法に加え、昨今普及してきた迅速法の原理、とくに遺伝子検査学的手法を応用した各手法とその問題点を説明できる。①
10	槇村　浩一	教授(兼)	微生物検査室で従来から用いられている臨床検査方法に加え、昨今普及してきた迅速法の原理、とくに遺伝子検査学的手法を応用した各手法とその問題点を説明できる。②
11	槇村　浩一	教授(兼)	微生物検査室で従来から用いられている臨床検査方法に加え、昨今普及してきた迅速法の原理、とくに遺伝子検査学的手法を応用した各手法とその問題点を説明できる。③
12	松村　　充	准教授	薬剤耐性菌の迅速同定法の問題点を説明できる。さまざまな症例や検体に応じた最も適切な検査法の選択ができる。①
13	松村　　充	准教授	薬剤耐性菌の迅速同定法の問題点を説明できる。さまざまな症例や検体に応じた最も適切な検査法の選択ができる。②
14	松村　　充	准教授	薬剤耐性菌の迅速同定法の問題点を説明できる。さまざまな症例や検体に応じた最も適切な検査法の選択ができる。③
15	松村　　充	准教授	薬剤耐性菌の迅速同定法の問題点を説明できる。さまざまな症例や検体に応じた最も適切な検査法の選択ができる。④

事前事後学修の内容およびそれに必要な時間		
	【事前学修】	次回授業部分の資料を事前に読んでおくこと。 次回の授業内容を予習し、用語の意味等を理解しておくこと。
	【事後学修】	授業中の疑問点をまとめ、関連する文献等を利用し、次回授業までに解決しておくこと。
	【必要時間】	当該期間に30時間以上の予復習が必要。

教科書	随時指示する。
参考書	随時指示する。
成績評価の方法および基準	レポート50%、口頭試問50%
その他履修上の注意事項	試験やレポート等に対し、講義の中での解説等のフィードバックを行う。 カリキュラムマップのDP2が、この科目と本専攻の学位授与方針との関連を示している。